

大分プランゲ文庫の会 について

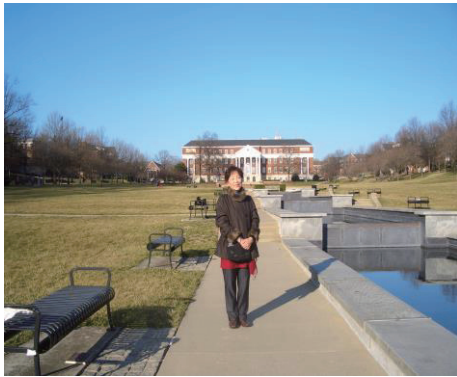
白土 康代

はじめに

平成 18 年 12 月に「大分プランゲ文庫の会」を立ち上げたから、10 年以上活動を続けていることになる。当初は規約などを作ることもせず、10 人ほどの会員と一緒に、思いつまままに読み進んでいた。さまざまな「発見」をもたらしてくれるプランゲ文庫の魅力に引きこまれるばかりで、会の運営は未熟であったと思う。3 年目に規約を整備した。「プランゲ文庫収蔵の大分県で出された雑誌などを調査、研究し、地域の先人達の思いを受け止め、地域文化の向上に資する」ことを会の目的とした。プランゲ文庫は受け止め方でさまざまな意味をくみ取ることができるが、とりわけ地域史にとっての意義を強く感じたからである。現在までに会の活動、調査研究を第 4 号まで、さらに特別号を含めて、計 5 冊の記録集を刊行した。以下にプランゲ文庫の説明と、データベースなどの活用方法、およびその地域史における意義について述べる。具体的な活動、成果については記録集を読んでいただければと思う。

プランゲ文庫について

プランゲ文庫は、歴史家プランゲ博士（1910～1980）の名前に因んで命名されたコレクションである。アメリカ、州立メリーランド大学のマッケルディン図書館およびホーンベイク図書館に収蔵されている。そのほとんどが、余所ではまず読むことのできない「一品もの」である。



マッケルディン図書館



ホーンベイク図書館

プランゲ文庫は、終戦後、日本がアメリカを中心とする連合軍に占領されていた時期の、あらゆる種類の、そしてほとんどすべての出版物を収めている。大手新聞社の出す新聞や雑誌、著名な作家や学者の著作物はもちろん、無名の市井の人々や中学生の出した同人誌、青年団誌、社内報や夏休みの宿題帳、楽譜や写真集にいたる文字どおりあらゆる種類の出版物である。日本で確かに出版されてはいても、とりわけ市井の人々の出した雑誌類は、

そのほとんどがいまでは図書館の郷土資料室などにも収蔵されていない。価値なきものとして、いつのまにか失われているからである。しかし GHQ の占領政策の一環として行われた検閲制度の「おかげ」で それらは米国、メリーランド州立大学の図書館に収められている。マイクロフィッシュに写し取られ、さらにデジタル化され、現在では徐々にではあるがパソコン上でも読めるようになってきている。それというのも、歴史家のプランゲ博士がアメリカに持ち帰り整理保存に努めたからである。プランゲ文博は真珠湾攻撃を題材にした映画「トラ、トラ、トラ」の原作者としても知られているが、占領当時、GHQ の歴史室長をしていた。歴史家としての慧眼が、検閲制度終了後、破棄されることになっていたそれらの出版物の歴史的価値を見抜いたのである。さまざまな苦労はあったが、彼は勤務校であったメリーランド州立大学に持ち帰ることに成功した。新聞 18,047 タイトル、雑誌 13,799 タイトル、図書・パンフレット約 71,000 タイトル、報道写真約 10,000 枚、地図約 640 枚、その他検閲関連の英文資料などが含まれている。



プランゲ博士

GHQ の行った検閲について簡単に触れておきたい。昭和 20 年 8 月終戦後、進駐してきた連合軍最高司令官司令部 GHQ/SCAP は言論統制、検閲を行った。占領国として当然の政策ともいえるが、検閲を行っていることを公にすることを極力知られないようにしていたことが GHQ 検閲の特徴である。GHQ が進めていた日本民主化政策とは矛盾するからであろう。

G2(参謀第二部)に属した CCD(民間検閲部隊)はゲラ刷りを二部提出させ、検閲実施後、一部を出版者に返却し、もう一部を CCD に保管した。日本全体が三つの地域に分けられたが、大分県は福岡第三検閲局の管轄であった。郵送により提出したが、大分軍政部に直接持参することもあったという。

最初は事前検閲であったが、極左極右の一部の出版物を除き、昭和 22 年 10 月より、徐々に事後検閲となり、昭和 24 年 10 月には終了した。CCD には日本中から集められた膨大な量の「紙の山」が残された。この焼却される運命にあった「紙の山」が、現在プランゲ文庫と呼ばれるものであるが、当時は単に「占領軍資料」と呼ばれていた。この「占領軍資料」には、検閲のために集められた出版物とそのゲラ刷りのみでなく、出版届や、英文とその

翻訳文からなる検閲文書なども含まれる。たとえば、別府市で出された『大分春秋』の編集発行人である前田三七男は、原爆関連の記事を掲載したことや、翻訳権侵害のことで厳重注意を受け、東京のCCDに「出頭」したが、その時の弁明の手紙などを読むことができる。別府の印刷所に印刷中止の電報を出したが間に合わず、多大な経済的な損失をうけたことなどが、自社の名前入りの原稿用紙に綿々とかかれている。生々しい記録である。

持ち帰られた資料の整理が始まったのは、1960年代である。保存整理には多くの困難が伴ったが、1978年に大学の正式なコレクションとなり、「ゴードン・W・プランゲ文庫 ー 1945ー1949 日本における連合軍の占領資料」と名付けられた。プランゲ文庫の誕生である。日本も協力し、本格的な目録作業が始まったのは1992年からで、現在でも続いている。

しかし目録作業が進む過程で大きな問題が生じた。戦後の質の悪い酸性紙は時の経過とともに劣化が進む。そのためメリーランド大学は日本の国立国会図書館と雑誌保存共同事業を開始する。雑誌類のマイクロ化を手始めに、新聞と関連文書のマイクロ化も手がける。完成したマイクロ資料は販売され、日本国内では国立国会図書館はもとより、早稲田大学をはじめとするいくつかの大学がコンプリートで所蔵している。また多くの県立諸図書館では、その県で出された雑誌のマイクロ版を所蔵している。さらに現在ではデジタル化されたものが公開され、パソコン上で読むことも徐々にできるようになってきている。

データベースについて

目録作業が進んだとはいえ、70年前の、劣化したガリ版刷りの雑誌を読み解くことは苦勞のいる作業である。しかし2004年にできた「20世紀メディア情報データベース」を活用すればリサーチ作業は飛躍的に便利になる。

著者名、雑誌タイトル、記事タイトル、本文小見出し、分類番号、分類項目、編者、発行所、出版者で検索ができる極めて便利なツールである。また検閲に関する情報も入手できる。



ボーンベイク図書館内 手袋を

具体的な例を一つ上げる。たとえば記事タイトルに「別府 旅」と入力すると、65 件ヒットする。その中の一つ「別府修学旅行記」の書誌情報を見ると、この修学旅行は昭和 22 年 3 月 25 日広島県第二高等女学校校友会が発行した『緑ヶ丘』という雑誌の 10 頁から 11 頁にかけて掲載されていることなどを確認できる。最寄りの図書館を通じて国立国会図書館などから複写をとりよせることができる。戦後すぐに、別府では修学旅行生を受け入れていたこと、さらに付記された検閲文書からは、別府に進駐していた米軍に触れた個所が削除されたことなどが分かる。

執筆者の欄に、肉親や知人の名を入力し、戦争未亡人となった母親が地元の同人誌に投稿していた短歌をいくつも探し当て、歌集を作った人もいる。全集から漏れている著名な作家の書いた作品を「発見」することもある。

新聞はリード部分を 100 字まで読むことができる。西日本で発行された新聞のうち、福岡の「西日本新聞」「九州タイムズ」、佐賀の「佐賀新聞」、長崎の「長崎民友」「長崎日日」「佐世保時事新聞」、熊本の「熊本日日新聞」、大分の「大分合同新聞」、鹿児島島の「南日本新聞」が入力済みである。

この「20 世紀メディア情報データベース」は NPO 法人インテリジェンス研究所が運営している。npoontelligence@gmail.com

遠くアメリカの図書館に、70 年前、占領下にあった日本の人々の手によって書かれたものがある。それらに手軽にアクセスができる。それはコンピュータ技術の発達により時間と空間を越えることができるようになったことにもまして歴史と書物への敬意にあふれた人々の努力に負っていると感じている。

地域史における意義

プランゲ文庫は占領政策による検閲によって生まれたものであることから、占領期にアメリカが行ったメディア戦略の研究資料として受け取られることが多かった。

しかし、プランゲ文庫は、同時に地方史にとって貴重な資料でもあることを強調しておきたい。検閲の対象があらゆる出版物に渡っているからである。たとえば職域雑誌、青年団報、高校生がクラスの仲間と出した手作りの文集など、通常は、時の経過とともに失われていくものであるが、プランゲ文庫ではそれらを読むことができる。敗戦による自信喪失、価値紊乱、極度の生活難にも関わらず、突然に与えられた「言論の自由」を享受し、挫折と希望がないまぜになった時代への思いをぶつけた手作りの雑誌である。そうした雑誌には、戦争中は、自分の考えや思いを発言したり、著わすことのほとんどできなかった市井の人々の声があふれている。いわゆる正史からは聞こえてこない声が聞こえてくるからである。山口県、横浜市、茅ヶ崎市など自治体による県史、市史編纂にプランゲ文庫の調査研究の結果が取り入れられていることもその声を正史にとどめようという努力だと感じる。

プランゲ文庫収蔵誌の多くは、昭和 23 年にできたばかりの納本制度がまだ十分機能していなかったこともあり、国立国会図書館はもとより、地元の図書館の郷土資料室などにも

ほとんど収蔵されていない。このこともプランゲ文庫に地域史の貴重な資料としての価値をもたらしていることも付け加えておきたい。

終りに

平成 20 年 9 月、平成 23 年 3 月と二度、メリーランド大学を訪れた。一度目は「本当にそんなものがあるのか見てみたい」という思いから。二度目は二週間滞在し、大分県の雑誌、新聞（当時はまだ国会図書館にはマイクロが入っていなかった）を中心に調査、そして表紙の撮影などを行った。いつも見ているマイクロからの白黒の複写ではなく、「実物」は思いがけず色彩にあふれていることに驚いたこと、案内された書庫の中で、日本製のお手玉が紙押えとしてそっと乗せられていたことなどを時折思い出す。

大分プランゲ文庫の会は、当初、漠然と思い描いていた活動よりも、その範囲も種類も展開方法も多様となり驚いている。プランゲ文庫の不思議な力をいっそう感じている。先に述べたように会の目的は「プランゲ文庫収蔵の大分県で出された雑誌などを調査、研究し、地域の先人達の思いを受け止め、地域文化の向上に資する」ことであるが、現在、まだ半分ほどが手つかずである。読 110 タイトルすべてを読み解くまでは会を継続したいと思っている。

参考文献

白土康代著『占領下の新聞 別府から見た戦後ニッポン』弦書房 2015 年

(しらつち・やすよ 大分プランゲ文庫の会 代表)